

父親の対児感情と父性行動の関連性

藤川 信子, 千葉 陽子, 我部山 キヨ子*

The Relationship between Paternal Sentiments Toward Child and Paternal Behavior

Nobuko FUJIKAWA, Yoko CHIBA, Kiyoko KABEYAMA*

Abstract: This study investigated the relationship between paternal sentiments toward the child and maternal assessment of paternal behavior. A questionnaire was sent to 343 couples with a 3-to 4-month-old infant. All infants were the couple's first normally born child. Fathers in their teens got high scores regarding avoidance of their children. The rivalry indices of these young fathers were also high. When the gender of the infant was what the father wanted, his wife gave a significantly higher scores to the item of accessibility of the father to the child than when the gender of the infant was contrary to what the father wanted. As the ages of the fathers advanced, the wives gave higher scores to their husbands' degree of psychological support, social dependability, and personal contact with the child. When the sibling order of the fathers was somewhere in the middle, they got significantly higher scores for affection in infant-rearing than when the father was the eldest or youngest son. The fathers who were neither the eldest nor youngest son also tended to help their wives more with infant-rearing activities and with housework.

Our findings show that counseling of fathers should be conducted according to paternal behavior characteristics and the patterns of paternal sentiments toward their children.

Key words: Father, Infant, Paternal sentiments toward the child, Paternal behavior, Maternal assessment.

はじめに

近年核家族化が進行する中で、父親も協力して子育てを行う機会が増加し、また要求も高まっている。そのような中で、父親の在り方、父親の子供への意識も注目されるようになってきた。父親の役割や父親が子供に与え

る影響については、様々な研究により報告されている¹⁻⁴⁾。しかし、具体的には父親のどのような対児感情が父性行動と関連しているかはあまり明確ではない。そこで本研究では、父親の対児感情と父性行動の関連性について調査した。

対象と方法

1. 対象

対象は、平成4年6月～9月に京都府及び大阪府下の6病院(京都大学医学部附属病院・済生会野江病院・済生会茨木病院・北野病院・川村産婦人科医院・都倉病院)で第1子を正常分娩し、生後3～4ヵ月の児をもつ

京都府立医科大学附属病院(京都市上京区河原町通広小路上ル)

Nursing Divison, Hospital of Kyoto Prefectural University of Medicine

* 京都大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻
* Special Division of the Science of Midwifery,
College of Medical Technology, Kyoto University
1994年7月26日受付

表1 父性行動の評価項目

父性行動得点	
<p><育児行動度></p> <ul style="list-style-type: none"> ・おむつをかえてくれる ・子どもをお風呂に入れてくれる ・散歩につれていく ・だっこする ・泣いている時にあやす ・寝かしつける 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに触る ・話しかける ・名前を呼ぶ ・ミルクをあげる ・子どもの相手になる
<p><家事協力度></p> <ul style="list-style-type: none"> ・食事のあとかたづけを手伝う ・掃除を手伝ってくれる ・買い物に行ってくれる 	<ul style="list-style-type: none"> ・お風呂の準備をしてくれる ・食事を作ってくれる ・ゴミを出してくれる
<p><精神的支援度></p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもについての相談にのってくれる ・愚痴を聞いてくれる ・早く帰ってきてくれる ・ねぎらいの言葉をかけてくれる 	<ul style="list-style-type: none"> ・あなたの身体をいたわってくれる ・頼りになる
<p><社会的信頼度></p> <ul style="list-style-type: none"> ・収入が安定している ・地域との関わりに積極的である ・親戚付き合いを積極的にする 	<ul style="list-style-type: none"> ・あなたの両親をいたわる ・仕事への意欲がみられる <p>(子どもが生まれる前と比べて)</p>
対児接触態度	
<p><肯定的項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・うれしそう ・しあわせそう ・たのしそう 	<p><否定的項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・めんどくさそう ・びくびくしている ・よそよそしい

夫婦343組である。この頃の児を選んだ理由は、エインスワース⁵⁾によると、「児は生後3ヵ月で色々な行動を通して養育者と親密な関係を保とうとする」といわれており、児の感情の発達に伴って父親の児への関与度が増すと考えられたためである。そのため、出生体重が2,500g未満や長期入院の児は、発達の側面の遅れや、両親との接触期間が短縮することから、親子の相互作用に悪影響が生じる可能性を考慮し、対象から除外した。

2. 方法

調査方法は、郵送による無記名式のアンケート調査である。

父親に関するアンケート項目は、年齢、最終学歴、兄弟数・構成・順位、出生前に望んでいた性別、対児感情(接近感情・回避感情・育児感情)から成る。対児感情は現在の我が

子へのイメージを調査するもので、その質問項目は花沢⁶⁾の「赤ちゃんのイメージ評定表」を父親に適合するように一部修正し使用した。母親に関するアンケート項目は、職業、現在の家族形態、同居者と家事・育児協力者、妻から見た夫の父親としての評価、妻から見た夫の対児接触態度である。妻から見た夫の父親としての評価は、表1に示すように夫の育児行動度・家事協力度・妻への精神的支援度・社会的信頼度を問う28項目より成り、これらの合計得点を父性行動得点とした。妻から見た夫の対児接触態度についての質問項目は、肯定的項目と否定的項目をそれぞれ3項目ずつ設定した。そして本論文での父性行動は、妻から見た夫の父親としての評価と、妻から見た夫の対児接触態度により測定した。

3. 分析方法

対児感情は、花沢の式で算出した。花沢の対児感情評定尺度によると、接近得点は、高いほど児に対して肯定的・受容的な感情を、また回避得点は、高いほど否定的・拒否的な感情を抱いていることを表す。拮抗指数は、高いほど児に対する接近感情と回避感情とが個人の中で相克していることを表し、「拮抗指数＝回避得点÷接近得点×100」で算出した。育児感情得点は、高いほど育児に対して積極的な願望を抱いていることを表す。

妻から見た夫の父親としての評価については、「非常にする(そのとおり)」3点、「かなりする(そのとおり)」2点、「いくらかする(そのとおり)」1点、「全くしない(そんなことはない)」0点の4段階尺度とし、育児行動度・家事協力度・精神的支援度・社会的信頼度のそれぞれの項目毎に合計得点を出し、これら4群の合計得点を妻から見た夫の父性行動得点とした。対児接触態度についても肯定的項目には前述と同じ尺度得点を配し、否定的項目については逆に得点化した。従って、どちらも得点が高くなるほど父性行動が良好なことを示している。そして、各対児感情を合計得点により人数を4等分し、「低値群」「やや低値群」「やや高値群」「高値群」に分け、これらと父性行動について、父親の背景因子との関連性をふまえて分析した。分析には、

統計学パッケージ HALBAU を用い、有意確率を5%とした。

結 果

1. アンケート回収率

343組の夫婦の中で、夫婦共に回答が得られたのは160組で、そのうち有効回答は153組、アンケート回収率は44.6%であった。

2. 対象の背景(表2)

父親の平均年齢と標準偏差は30.9±5.1歳であった。最終学歴は「大学卒」が最も多く71人(46.4%)で、平成2年国勢調査⁷⁾によるこの年代の大学進学率よりも高率であった。父親の兄弟数は「2人」が78人(51.0%)で過半数を占め、兄弟構成では「男と女」が86人(56.2%)と最も多く、兄弟順位では「長男」が最も多く95人(62.1%)であった。また、出生前に望んでいた性別と実際の性別との関係を見ると、「望んでいた性別どおり」が67人(43.8%)と最も多かった。

3. 対象の背景因子と対児感情の関連性

図1-1、1-2は父親の年齢と対児感情の関連を示したものである。接近得点においては「30～39歳」が「20～29歳」に比べて高い傾向が認められた。育児感情得点は年齢群別の差はほとんどなかった。回避得点と拮抗指数はいずれも「18～19歳」が最も高値であっ

表2 父親の背景

項 目	内 容
平均年齢	30.9±5.1歳(18～41歳)
最終学歴	中学校卒 10人(6.5%)、高校卒 50人(32.7%)、短大卒 2人(1.3%)、大学卒 71人(46.4%)、大学院卒 4人(2.6%)、その他 16人(10.5%)
兄弟数	1人—10人(6.5%)、2人—78人(51.0%)、3人以上—59人(38.6%) 無回答—6人(3.9%)
兄弟構成	男だけ 61人(39.9%)、男と女 86人(56.2%)、無回答 6人(3.9%)
兄弟順位	長男 95人(62.1%)、中子 11人(7.2%)、末子 40人(26.1%)、 無回答 7人(4.6%)
出生前に望んでいた性別と実際の性別との関係	望んでいた性別どおり 67人(43.8%) 望んでいた性別と違う 54人(35.3%) どちらでもよかった 28人(18.3%)、無回答 4人(2.6%)

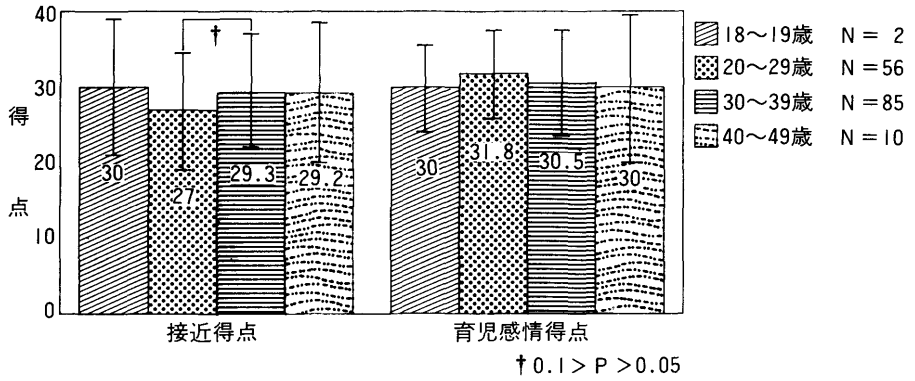


図 1-1 父親の年齢と接近得点・育児感情得点

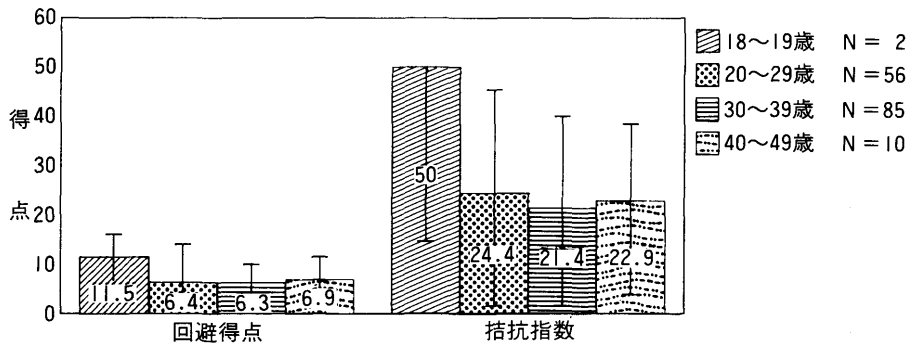


図 1-2 父親の年齢と回避得点・拮抗指数

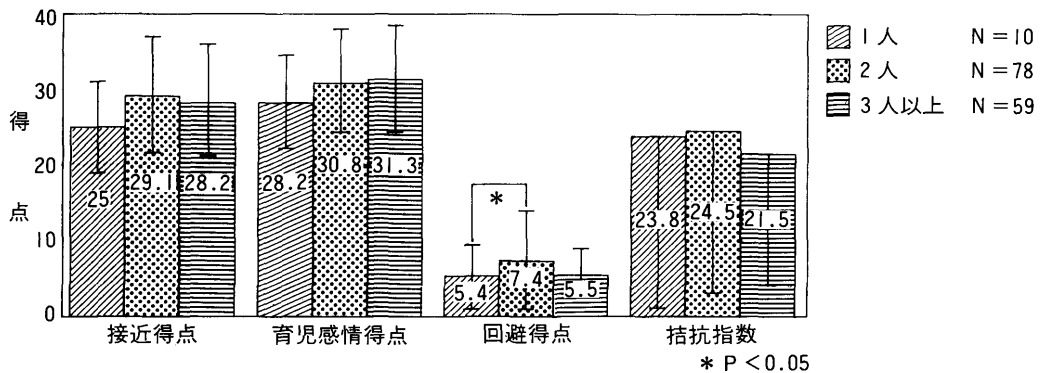


図 2 父親の兄弟数と対児感情

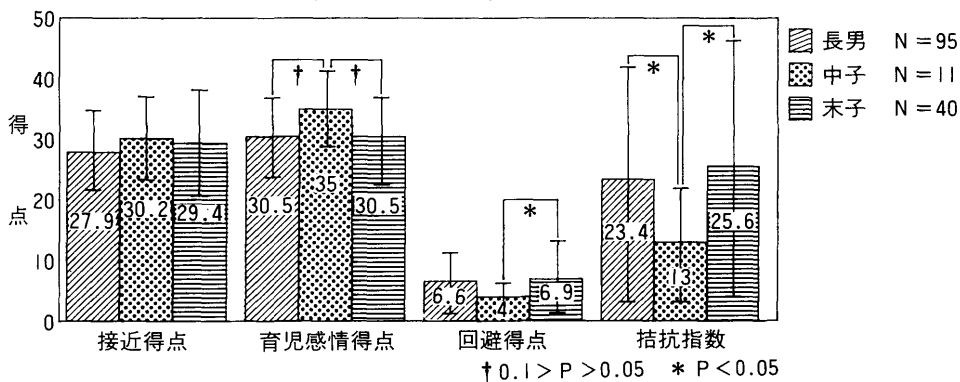


図3 父親の兄弟順位と対児感情

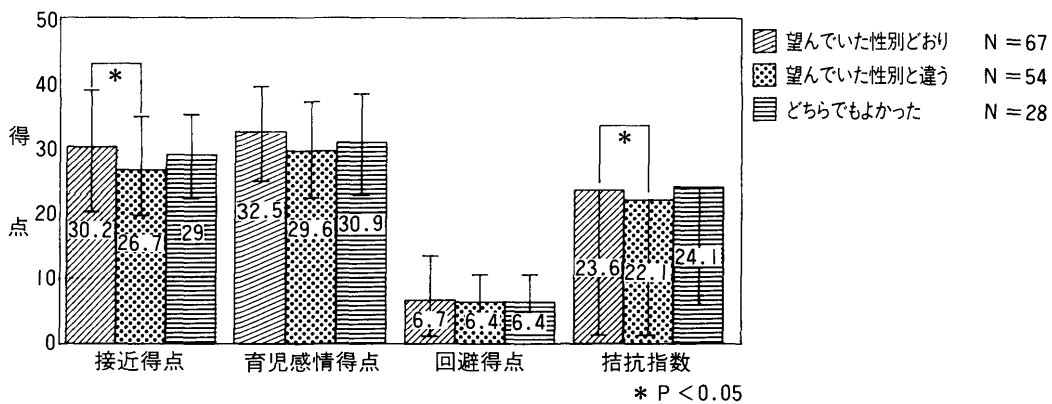


図4 父親の望んでいた性別と対児感情

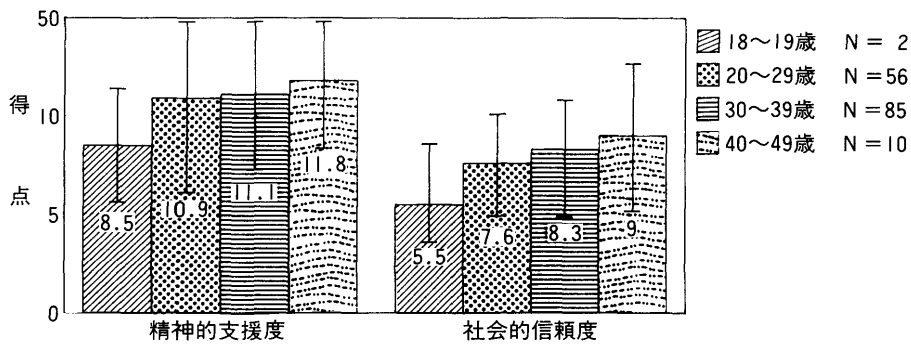


図5-1 父親の年齢と精神的支援度・社会的信頼度

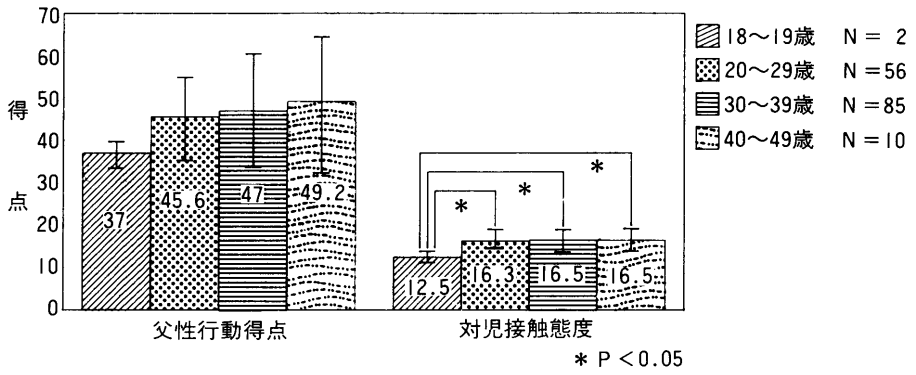


図 5-2 父親の年齢と父性行動得点・対児接触態度

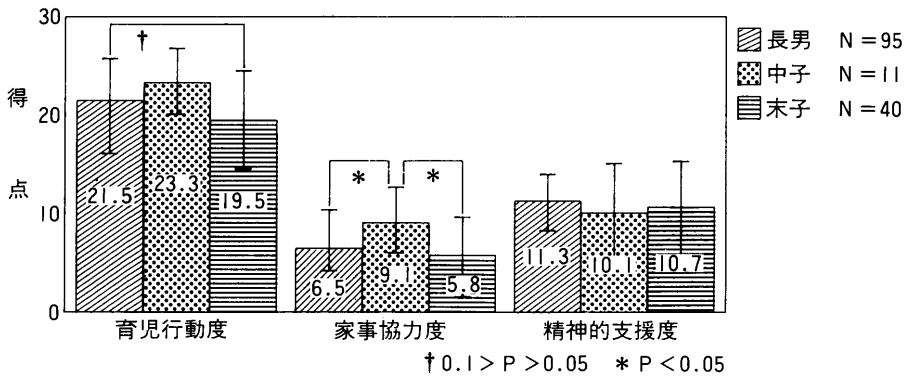


図 6-1 父親の兄弟順位と父性行動

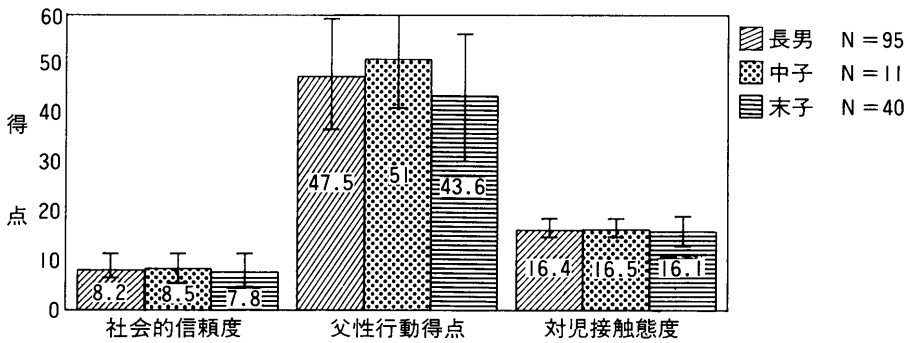


図 6-2 父親の兄弟順位と父性行動

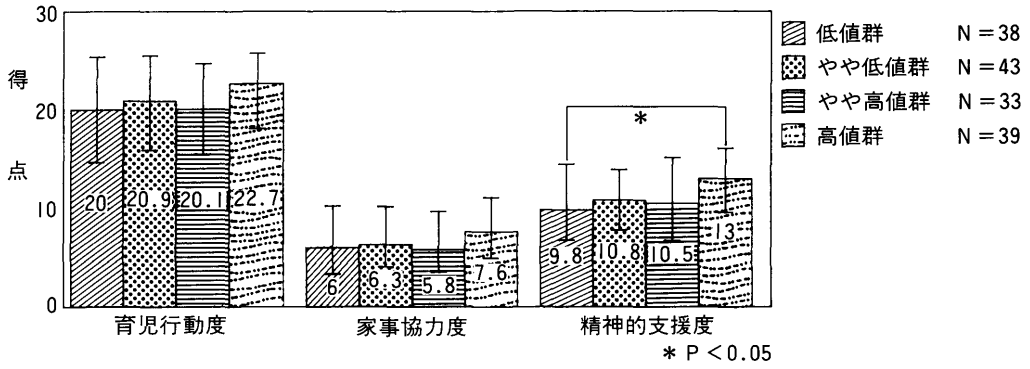


図7-1 接近得点と父性行動

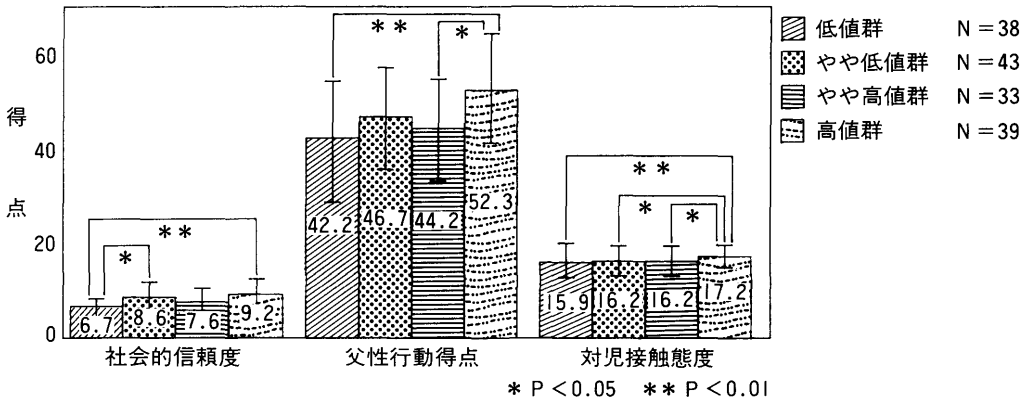


図7-2 接近得点と父性行動

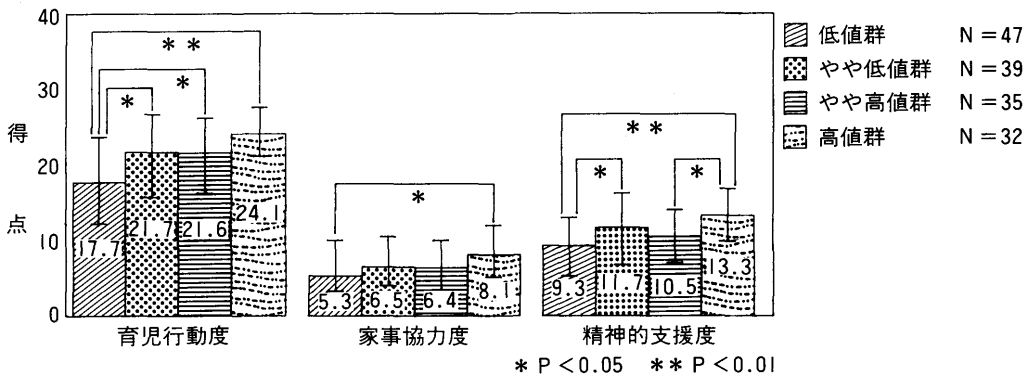


図8 育児感情得点と父性行動

た。

父親の兄弟数との関連では，図2に示すように接近得点・育児感情得点は「1人」が最も低値であり，回避得点では「2人」に比べて有意に低くなっていた。育児感情得点は兄弟数の増加につれて高くなり，拮抗指数は「3人以上」が最も低値であった。

父親の兄弟順位との関連では，図3に示すように接近得点・育児感情得点は「中子」が最も高値であり，特に育児感情得点では「中子」が「長男」と「末子」に比べて高い傾向が認められた。反対に，回避得点では「中子」は「末子」に比べて，拮抗指数では「中子」は「長男」と「末子」に比べて有意に低くなっていた。

父親の望んでいた性別との関連では，図4に示すように接近得点・育児感情得点は「望んでいた性別どおり」が最も高値で，中でも接近得点は「望んでいた性別と違う」と比べて有意に高値を示した。

父親の学歴及び兄弟構成と，対児感情の間には有意の関係はなかった。

4. 対象の背景因子と父性行動の関連性

図5-1は父親の年齢別精神的支援度と社会的信頼度を，図5-2は父親の年齢別父性行動得点と対児接触態度を示したものである。いずれも「18～19歳」が最も低値で，年齢が高くなるにつれて高値を示した。特に対児接触態度では，「18～19歳」が他の全ての年齢群と比べて有意に低くなっていた。

父親の兄弟順位との関連では，図6-1，6-2に示すように精神的支援度を除く全てにおいて「中子」が最も高値であり，「末子」が最も低値であった。特に家事協力度では「中子」は「長男」や「末子」に比べて有意に高値を示した。一方，精神的支援度では，有意ではないが「長男」が最も高値であった。

父親の学歴・兄弟数・兄弟構成や父親の望んでいた児の性別と父性行動の間に，いずれも有意な関係は認められなかった。

5. 父親の対児感情と父性行動の関連性

図7-1，7-2は父親の接近得点を4群に分け，各々の群の父性行動を示したものである。父性行動の全ての側面において接近得点「高値群」の得点が最も高く，「低値群」の得点は最も低くなっており，特に精神的支援度・社会的信頼度・父性行動得点・対児接触態度の接近得点の「低値群」と「高値群」の間で有意の差が認められた。

父親の育児感情と父性行動の関連においても，図8に示すように，接近得点と同じく育児感情の「高値群」の得点が最も高く，「低値群」の得点は最も低くなっており，育児行動度・家事協力度・精神的支援度の育児感情の各群間で有意の差が認められた。

父親の回避得点と拮抗指数は，4群間で父性行動の各得点に差は認められなかった。

考 察

1. 対象の背景因子と対児感情の関連性

父親の年齢についてみると，児に対する否定的・拒否的感情を示す回避得点や，個人の中で児に対して肯定的・否定的感情が相克していることを示す拮抗指数は，「18～19歳」が他の年齢群と比較して高値であった。このことから，「18～19歳」という若い年代の父親は，子供に対する接近感情と回避感情とが個人のなかで相克していると考えられる。斎藤⁹⁾は「男性は自分の個人的経験を通してこの父親の役割を自覚し，自分なりの仕方では父親の役割をはたしていくことによって父親となってゆく」と述べている。この個人的経験には，育った環境や周囲の人間との関わりなどが考えられるが，若い年代の生活経験の少なさや，父親になることによって必然的に起こる役割の変化や社会生活の変化に対応する準備性の脆弱さが，父親の役割を遂行する際に対児感情を悪化させたと考えられる。

父親の兄弟数との関連では，兄弟数「1人」が接近得点・育児感情得点において，最も低値を示した。これは，本人以外に兄弟がいない場合，兄弟の多い場合と比較して他者との

接触に不慣れなためと推測できる。一方、兄弟数が多いほど拮抗指数が低値を示したのは、兄弟数が多い中で成長した場合は、児に対する肯定的・受容的な感情が自然に養われ、個人の中で児に対する肯定・否定の相矛盾する感情の発育が抑制されたためと考えられる。父親の望んでいた児の性別との関連では、「望んでいた性別どおり」は「望んでいた性別と違う」より接近得点が有意に高くなっていた。従って、望んでいた性別と違う場合には、児に対する肯定的・受容的な感情の形成を促進させるためにも、特に生後早期から父子の接触を積極的に促し、対児感情が良好な方向に向けられるよう援助することが重要である。

2. 父親の背景因子と父性行動の関連性

父親の年齢との関連は、年齢が高くなるにつれて精神的支援度・社会的信頼度・父性行動得点・対児接触態度の評価がいずれも高くなり、特に対児接触態度では「18～19歳」が他の年齢群と比べると有意に低かった。「父は家庭で男性の代表者、家庭経済の責任者として、母とは違った意味で子供にとって大きい地位をしめる」⁹⁾と言われるように、父親の年齢が高くなるに従い、社会生活の積み重ねや人間としての成熟が、父親行動の各側面を総合的に高めたと推測できる。

また、父親の兄弟順位との関連は、育児行動度・家事協力度・社会的信頼度・父性行動得点のいずれにおいても、「中子」が高値であり「末子」が低値であった。このことより、兄弟順位は将来の父性行動の形成に何らかの影響を与えることが示唆された。

3. 対児感情と父性行動の関連性

対児感情と妻からみた父性行動の関連をみると、接近得点は高くなるほど父性行動の各側面で評価が良好であった。このことより、児に対して肯定的・受容的な感情をもっている父親は、父親としての行動も積極的に行っていると考えられる。特に、精神的支援度と社会的信頼度の接近得点の「高値群」は「低値群」より有意に高くなっていることより、

父親は児に対して直接的に関わるよりも、妻を精神的に支え生活の基盤を確立させるという社会的役割を遂行することによって、児に間接的な影響を及ぼしていると考えられる。斎藤¹⁰⁾も「妻を情緒的に支え、その精神的安定を保つことによって、赤ん坊の精神的健康を促すことに間接的に親としての影響を子供に与えている」と父親の役割について述べており、授乳などを通しての母親との結び付きがまだ強い生後3～4ヵ月は、父性行動は児に対してより妻に対するいたわりという形で現れると考えられる。また、妻も産後の母子関係が密接な時期は児に対するよりも妻自身に対する精神的支援を求めていると考えられ、相互のニードの一致がみられたとも推測できる。

また、育児感情得点の高い人は精神的支援度も有意に高値であることから、児に対して肯定的・受容的な感情をもっている父親は、妻への精神的支援も高まり、その支援が育児行動度や家事の協力として表出されたと推測される。

結 論

①若年の父親は、対児感情の回避得点・拮抗指数が高値であり、父親役割を果たす上で、個人的経験の不足が、対児感情に影響を与えると考えられた。

②児が父親の望んでいた性別どおりの場合は、望んでいた性別と違う場合より、接近得点が有意に高かった。

③父親の年齢が高くなるにつれて、妻から見た社会的信頼度・精神的支援度の得点が有意に高かった。

④「中子」は育児行動度・家事協力度・社会的信頼度・父性行動得点が高値であり、兄弟順位は将来の父性行動の形成に影響することが示唆された。

⑤接近得点の「高値群」は父性行動の全側面で評価が最も高く、「低値群」は最も低く、特に精神的支援度・社会的信頼度で有意に高

値を示した。

⑥育児感情得点も得点が高くなるにつれて育児行動度・家事協力度・精神的支援度が増し, 特に「高値群」と「低値群」の間で有意の差がみられた。

おわりに

本研究では, 父親の対児感情と父性行動の関連性について調査した。その結果, 対児感情の類型に基づいた特徴的な父性行動や母子関係が密着している時期の父性行動の特性が示唆された。

この研究で得たことを基に, 妊娠中の両親学級・入院中の父子対面・父親への指導などを通して, 直接的な育児技術の指導のみならず, 妻への精神的支援や家族・親戚との良好な関係作りなどにより, 妻が育児に専念できる環境を作ることの大切さを指導面で取り入れ, 父親の児への肯定的・受容的感情を高めるように援助していきたい。また社会全体としても, 夫が安心して育児休暇を取れる環境作りや育児休暇中の経済的期盤の保障をはかるためのシステム作りを積極的に推進してい

くことが重要と考える。今回の調査では「18～19歳」の対象数がわずかであったため, 今後対象数を増やして調査・検討を重ねたい。

文 献

- 1) 堀真一郎: 現代の親子関係と家庭教育, 東京: 文化書房博文社, 1987: 136
- 2) 宮崎 叶: 父性についての考察, 日本総合愛育研究所紀要 1987: 22-25
- 3) 押尾祥子: 父親行動のアセスメント, 助産婦雑誌; 1985: 39(11): 36
- 4) 北原龍三: 男が父親になるとき, 助産雑誌; 1982: 36(11): 889
- 5) 井上 七他: 父子間のアタッチメント形成と父親の準備状態の関連について, 自治医科大学看護短期大学専攻科助産学専攻研究収録集(平成3年度第2回生); 1991
- 6) 花沢成一: 母性心理学, 東京: 医学書院, 1992: 242
- 7) 総務庁統計局: 国勢調査報告, 1990: 3(1): 218
- 8) 平井信義, 斎藤耕二: 父親の辞典, 東京: ぎょうせい, 1981: 197
- 9) 前掲書1), 138
- 10) 前掲書8), 186